慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヘンリー・チャールズ・ケリイの地代学説
Sub Title	
Author	内田, 勇二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.8 (1928. 8) ,p.1125(109)- 1154(138)
JaLC DOI	10.14991/001.19280801-0109
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280801-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に謂ふ。經濟史の研究に當りて、その一時代のみをかけ離して論ずることは不可なり。その一方面のみを見て之が全象を斷定することは不可なり。物には萬事表と裏とあり。脈々たる進化の連鎖を辿ることなくして叙述せられたる史論の如きは畢竟一篇の蒐集錄のみ。表より裏より縱横に之を吟味解剖し、その眞正の史實の上に立脚し、自家の僻見を交へざるの態度を以てせざれば、終極に至るまで眞正の經濟史は描く事能はず。德川時代に於ける人口の增加移動と近代的都市の形成、奢侈經濟の發展、貨幣經濟の發達、而して商業資本主義の發生發達並に之に關聯して「封建的富」より「市民的富」への移動――從つてブルジョア經濟の發達等、この間の事情を十分に吟味研討したる後に非れば、實は封建制度の崩壞と明治維新の「政治革命」並にそれに隨伴して行はれたる「經濟革命」及び近代日本資本主義の發展に關する眞髓を把握することは到底覺束なき事なり。

ヘンリー・チャールズ・ケリイの地代學說

內田勇二

一

自然又は自然を通じて働く神を以て、價値の唯一の源泉と做すの思想は、經濟學の中に其根を下ろす事淺からざるものがある。そはフイジオクラアトを通じて經濟學祖アダム・スミスにすら影響し、次でトオマス・ロバアト・マルサスに依つて繼承せられて居る。而して此の思想の具體的なる一表現は、彼等の地代天惠說に於て最も良く見出さるるものである。(一)

フイジオクラアトは、富を生產するものは農業勞働のみ、從つて農業階級のみが其余剩を以て爾餘の諸階級を維持すると說き、スミスは、農業に於ては自然が人と共に勞働すと做し、而してマルサスは、地代を以て、土地が之を耕作するに要する人數以上の人口を維持し得ると云ふ天與の性質を有する事の、明白なる表示に外ならずと思惟したのである。(二)彼等に從へば、地主階級と雖も不生產的乃至社會上不必要なるものには非ずして、却つて彼等は經濟上及び社會上高位の階級に屬するものである。地主階級は單に政治的に有意義なるのみならず、又最初に土地を占有し、之れを開

拓し、尙排水灌漑等の必要なる土地改良に腐心するが故に、經濟的にも亦意義深きものがある。マルサスの如きは云ふ、若し地代にして存せざらんか、都市も無く、陸海軍も無く、藝術も無く、學問も無く、精巧なる工業品も無く、諸外國の便宜品、奢侈品も無く、而して又單に個人を向上せしめ品位あらしむるのみならず、又全民衆の間に其恩惠的影響を及ぼす處の、教養と優雅とを有する社會は一つも存せぬに至るであらう、と。(三)

然し乍ら、十九世紀初頭の英國の實際的社會事情は彼等の所說を裏書するものであつたらうか。フイジオクラアトの云ふが如くならば、穀物が引續き高價を維持すれば維持する程、農業勞働者の所得の復歸が確保され、耕作は擴張し、土地生產物、從つて國富は增加し、而して國力亦增大す可き筈である。即ち穀物の高價なる一事はやがて又總ての社會階級に豐富なる所得を與ふる所以となるのである。(四)然るに當時の英國に於ては、穀價の昂騰と耕作の擴張とが著しき事實なりしに拘らず、勞働階級の狀態は英國社會史の信賴し得る記錄始まつて以來の最大困窮とも云ふ可き程度に迄達して居たのである。(五)

彼の偉大なる產業革命は必然新しき富の創造を伴つた。然し乍ら、產業の擴張其自體は、決して國富に對する勞働者の分前を增加するものでは無い。當時產業に從事せる賃銀勞働者は、此の新しき富の如何なる部分をも獲得し得ざりしのみならず、產業界の混亂に伴ふ失職をすら經驗した。大陸との間の多年の戰爭に付隨せる幾多の社會的悲慘事は、平和の克復と共に消滅せずして、一つに勞働階級の上に落ち掛つた。蓋し戰爭の終結は戰事中特に刺激せられたる工業に對する一大打擊となり、延ひて莫大なる失業勞働者を發生せしめたるのみならず、この賃銀が下落し物價が騰貴しつゝある際に、三十萬を下らざる除隊兵を勞働市場に投じたるが故である。加之ならず、勞働階級は又消費者として當時の政治的事情、就中通貨制度及び穀物法に依つて苦しめらるゝ事大であつた。而して此の都市勞働者の生活を脅かしつゝありし穀價の騰貴は同時に又農村勞働者の上に更に大なる壓迫を加ふるものであつた。蓋し產業革命の結果たる家內工業の沒落に依つて、曾ては農村に於ける有利なる副業たりし機織其他の工作的方面よりの收入の途を閉ざされ、更に其全力を農事に注がんとする時、大農側に於ける大資本の投下、小農民の能くし得ざる新耕作法の採用に依つて甚しく不利なる地位に置かれたる獨立小農民は、今や穀價騰貴の結果、耕作地と同樣彼等に取つて欠く可からざる休閑地並に放牧地を圍繞せられて愈〻其地位の維持が困難と成り、都市に赴いて工場勞働者と成るか、若しくは故鄕に留まつて純然たる日傭農業勞働者の地位に下るか、二途何れかを選ばねばならず、又土地を有する勞働者とも云ふ可きコッテイジヤア乃至スクウオッタアの如きも其共有地の上に有する權利を奪はれ、非常時に於ける唯一の避難所より拒否せらるゝに至れるが故である。此の小農民並にコッテイジヤア、スクウオッタア等が共有地の上に有せる權利は多くは慣習に基き、而して明文無き爲め、圍繞に際しては大地主の爲に無償にて奪はるゝか、乃至は、云ふに足らざる補償金を以て强制的に其權利を放棄せしめられたのである。(六)

斯かる圍繞運動の動機は云ふ迄も無く地代の騰貴である。而して地代の騰貴は土地生產物に對する需要の增加、從つて穀價の騰貴に依るものには非ざるか。更に又穀價の騰貴は、一般的經濟發

の時代、人口增加の趨勢の顯著なる時代に於て、此の人口の維持に對して利用し得る優良地が不充分であり、而して新しき土地が其位置の便否を問はず、又地味の如何に拘らず、耕作されざる可からざる事に基くものには非ざるか。土地支配階級が己れの利益を追求する時、そは舊き農村生活並にそれに付隨せる總ての關係及び利益を絕滅するものに外ならざるには非ざるか。

此處にリカアドオの地代論は從來の地代天惠說を打破す可く現れた。彼は云ふ、地代は自然の慈愛より生ぜずして却つて其鄙吝より生ずる。自然の勞働は其の爲す處多きが故に報酬を受けずして、却つて其の爲す處少きが故に報酬を受ける。地代は神の自由なる惠與には非ずして、單に地主にのみ有利にして消費者には比例的に有害なる價値の移轉に過ぎず、そは最早純收益乃至土地の餘剩生產物なりとの理由を以て利益と目し得可きものでは無い、と斯くてリカアドオの地代論はフイジオクラアト以來、最も合法的にして且つ最も優れたる種類の富なりと思惟せられ、萬人切望の的たりし地代所得に對し、最も不公正なるものとの宣告を下すものと成つたのである。（七）

（一）Cf. Gide & Rist, A History of Economic Doctrines, 2nd rev. & aug. ed., 1913, p. 16.

（二）Cf. Adam Smith, Wealth of Nations, 2nd ed. by Cannan, 1920, vol. I, p. 343; T. R. Malthus, An Inquiry into the Nature & Progress of Rent, A Reprint of Economic Tracts, Vol. VI, p. 20.

（三）Cf. Diehl u. Mombert, Ausgewählte Lesestücke, Bd. III, 1911; "Von der Grundrente," Diehls Einleitung, S. 1-4; Malthus, op. cit, p. 20.

（四）Cf. Diehl u. Mombert, op. cit., S. 4

（五）Alfred Marshall, Principles of Economics, An Intro. Vol., 7th ed., 1916, p. 177.

（六）Cf. J. L. & Barbara Hammond, The Town Labourer, 1760-1832, 1917, pp. 95, 104-105, 107-109; F. A. Ogg, Economic Development of Modern Europe, 1924, pp. 128, 147; J. L. & Barbara Hammond, the Village Labourer 1760-1832, 1912 pp. 52, 97-98, 100, 103-104; H. O. Meredith, Economic History of England, 1908, pp. 257-258.

（七）Cf. Ricardo, (1) Principles of Political Economy & Taxation, Conner ed., 1924, p. 53 note; Gide & Rist, op. cit., pp. 16-17.

二

今、リカアドオの地代學說の要點を示せば、地代なるものは同一の土地に於けるとも異なれる土地に於けるとを問はず、同量の資本及び勞働の使用に對する收益の差違に外ならぬ。而して此の收益の差異が其儘地代を形成する所以のものは、利潤率平均の法則存するが故である。同量の資本及び勞働の使用に對する收益に差異が生ずるは、一、地味の不同、二、位置の便否、三、土地收益遞減の傾向、なる三原因に依る。第一及び第二の原因は、同一面積の異なれる土地に於ける同量の資本及び勞働の使用に對する收益を不同ならしめ、第三の原因は、同一の土地に於ける資本及び勞働の最初の投下量と爾後の同一投下量との間の收益を相違せしめる。然し乍ら、此の三個の自然的因子が土地收益の上に何等かの影響を及ぼす爲には、更に土地生產物に對する需要が最優良地に投ぜられたる最も生產的なる資本及び勞働が齎らす生產物のみを以てしては充たされぬと云ふ事、換言すれば人口に比較して最優良地の供給が不足して居ると云ふ事、然も斯かる最優良地の供給を增加するの不可

能なる事を必要とする。然るに一般に土地供給の增加は不可能であり、而して又相當發達せる諸國に於ては既に最優良地が欠乏して來て居る。而して人々は人口の增加と共に漸次優良地より劣等地へと其耕作を進めざる能はざるが故に、最初に擧げたる三個の自然的因子は地代發生の根源たる收益の差違を生ぜしめ、且つ其額を左右し、而して最後の今や充たされたる條件、即ち土地供給量の不足不加增なる一事は人口法則と相俟つて、社會の發達に連れ、新地代の發生並びに地代の騰貴を促すのである。（一）

更に、此の地代を發生せしむる原因は同時に又國民所得の全分配に對し、個々の所得部門の發展傾向に對し、從つて最後に異りたる社會諸階級の經濟的境遇に對して決定的なるものである。即ち增加しつゝある人口に對して食糧を供給するの困難の增大、換言すれば土地耕作に伴ふ穀價の騰貴は、一、地代の騰貴、二、賃銀の騰貴、三、利潤の下落、なる三個の結果を齎らす。（二）然し乍ら、第一の結果と第二の結果との間には次の根本的差異が存する。即ち地代の貨幣價値に於ける騰貴には生産物の分前の增加が伴ふ。地主の貨幣地代が從前より大と成るのみならず、其の穀物地代も亦從前より大と成る。然るに『勞働者は從前より多くの貨幣賃銀を得る事は事實なるも、然も彼の穀物賃銀は減少する。而して彼に取つて賃銀の自然率以上に其市場率を維持する事一層困難と成るが故に、單に彼の穀物支配量のみならず、彼の一般的境遇も亦低下する。穀價が一割騰貴するに對し、賃銀は常に一割以下の騰貴をなすも、地代は一割以上騰貴する。』（三）次に、凡そ一切の資本に對する利潤は農業に於ける資本利潤に依つて決定せられる。然るに實物賃銀が略々不動なるに地代が騰貴すると

せば、其丈け利潤が下落するは自明の理である。即ち富及び人口增加の恩澤を專らにするものは獨り地主のみ、地主階級の利害は土地收益の分配上勞働者及び資本家の二階級の利害と相反するのみならず、そは又社會全體の一般的利害とも衝突する。蓋し『地主の狀態は食物の稀少不廉なる時程繁榮なることは無い。然るに爾餘一切のものは低廉に食物を獲得する事に依つて大ひに利益する』（四）が故である、と做すに存する。

然らば斯の如き不幸なる地代の上進は、之れを人爲を以て永久に阻止し得るものであらうか。リカアドオは之れに對して唯否定的なる回答を與へる。成程農業上の改良進歩は一國に於ける資本の減少と等しく、一時地代の下落を招來する。（五）然し乍ら、『穀物の付加量を得ることをば一層困難ならしむる處の原因が、進歩しつゝある諸國に於ては不斷に作用するに反し、農業又は耕作具に於ける著しき改良は稀にしか起らぬ。』（六）又『農業上及び分勞上の改善は一切の土地に共通である。其等の改善は個々の土地より得らるゝ原生産物の絶對量をば增加するも、然もそは以前個々の土地の間に存したる相對的比例をば恐らく甚しくは亂さない。』（七）故に農業上の改良進歩は其結局の作用に於ては、地代を發生せしむる要素を更に一層强むるものに外ならぬ。蓋しそは其改良に依つてのみ耕作し得、且つ經濟上利用され得るが如き、一層劣等なる土地への耕作の推移を容易ならしむるが故である。（八）尙外國の競爭とて亦永久的なる意義を有するものでは無い。英國民が原生産物の供給を大部分外國に仰ぐに至る程、外國に於ける原生産物の價格が下落することはあり得ぬ。英國が穀物の自由輸入を斷行するも、唯數週間を支ふる穀物量のみが輸入さるゝに止まる。そは唯不正常なる

地代の上進を阻止するのみ、正常なる地代の昂騰は之れを如何ともなし得なゞ。更に現在原生產物を輸出する國に於て、やがて之れを自國の消費にのみ充つるの時が來る可きや疑を入れぬと做すのである。(九)

斯の如くリカアドオの地代論をして、彼の陰慘なるマルサスの豫言を更に一般と色付けて人類の將來に對し極度の暗影を投ぜしめたるものは、當時の英國の實際狀態であつた。從つて之れと正反對なる體驗を爲したる米國の經濟學者ケリイ(Henry Charles Carey)が、一度リカアドオに依つて排擊せられたる經濟學に於ける自然法的觀念に、別樣の衣を纏しめて復活せしめんとせし事も亦自然の數と云はねばならぬ。十九世紀中葉に於ける米國に於ては、餘りに富裕に過ぐる階級も無く、又余りに悲慘なる貧困階級も存しなかつた。二つの太洋に依つて、米國は舊世界の一切の煩累より隔離せられて居た。當時米國が當面せる問題は唯一つ、即ち自然征服であつた。英國に於ける經濟學的發達を刺戟せるものは產業上の弊害即ち分配上の公正の問題であり、而して米國に於ける經濟研究の動機を供したるものは富の生產に對する充たされざる欲求であり、正に考察す可きは繁榮の經濟學であつたのである。(一〇)

(一)　Cf. Ricardo, op. cit. (1), pp. 46-49, 319.

(二)　Karl Diehl, Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft u. Besteuerung, II. Aufl., 1905, Bd. I, S. 181.

(三)　Ricardo, op. cit. (1), pp. 78-79.

(四)　Ricardo, (2); Influence of a Low Price of Corn, Works of Ricardo, new ed. by Mc Culloch, 1886, p. 3, 8.

(五)　Cf. Ricardo, op. cit. (1), pp. 56, 57-60.

(六)　Ricardo, op. cit. (2), p 377.

(七)　Ricardo, op. cit. (1), p. 148

(八)　Cf. Ricardo, op. cit. (2), p. 377 note; Diehl, op. cit., Bd. I, S. 180.

(九)　Cf. Ricardo, op. cit. (2), p. 384; Diehl, op. cit., Bd. I, S. 204, 337, 338.

(一〇)　J. R. Turner, The Ricardian Rent Theory in early American Economics, 1921, p. 4

III

即ち、ケリイの處女作「賃銀率論」(Essay on the Rate of Wages etc.)は一八三五年に公にせられ、而して其主著「社會科學原論」(Principles of Social Science)は一八五九年に完成されて居るが、實に此の期間は米國に於ける未曾有の經濟發展の時代であつた。一八三〇年より一八四〇年に至る十年間に人口は三二・七%の增加を來し、次の十年間には三五・九%、更に一八六〇年に至る次の十年間には三五・六%の增加を示した。(一一)而して此の三十年間に於て、米國の富は九倍と成つた。富は人口よりも更に急速に增殖したのである。一八六〇年に於ける人口一人當りの富は五一四弗にして、一八四〇年に於ける其れに比して二倍を超へ、一七九〇年に於ける其れに比すれば實に三倍以上と成つて居る。(一二)更に一八三〇年より一八五〇年に至る三十年間に、鐵道の哩數は二九哩より九、〇二一哩に增加し、然もケリイの鄕里たるフイラデルフイアは鐵道業の中心地であつた。而して交通機關の發達は廣大なる地域に散在せる人々の利害を緊密に結合せしめ、農場と工業都市との接觸を可

能ならしめ、國民的協力の實を擧げしめた。ケリイの思想の中心を爲す「團結の原則」(Principle of Association)は、唯斯くも明白なる事實を表明するものに過ぎなかつたのである。(三)

順當なる穀價と內國市場の發達とは農業に對する奬勵と成り、一方資本の蓄積、熟練の增加、農業機械の發明等と相俟つて、從來耕作に對する自然の抵抗大なるが爲めに棄てゝ顧みられざりし肥沃なる低地の沼澤の利用を可能ならしめ、耕作が漸次一層地味豐かなる土地に進み行くの狀を示しつゝあつた。又當時土地は平均の面積に分割せられ、其大部分は多數の中產階級に依つて所有せられて居た。當時米國に於ては、地主なる稱號は決して特別の榮譽を意味するものでは無かつた。更に又農業階級に對立するものとして明らかに區別し得る都市階級なるもの存せず、土地は屢〻爾餘の資本物件と同樣に賣買の目的物となり、而して邊境の土地が殆んど無償なるが爲め、耕作地の價値は殆んど其改良費を出ずる事がなかつた。之等の事實は正に土地資本說、地價再生產費說の出現を促しつゝあつたのである。(四)

更に十九世紀初葉の英國に於ける癌たりし過剩人口の問題は、此の人手の不足しつゝある國に於ては、何等の意味を有するものでもなかつた。否一八三〇年より一八六〇年に至る間の時期に於て、最も希望せられたるものは實に人口の增加に外ならなかつたのである。而して又耕地面積、農場の地價及び收穫高の著しき增加が急速に增大しつゝある此の人口と步調を合せて進んだのである。(五)勿論當時に在つても尙勞働運動あり、勞働組織の試みはあつた。然し乍ら之等が殆んど失敗に歸したにも拘らず、勞働者の境遇は絕へず改善されて行つた。(六)蓋し彼等の背後には廣大なる西部の自由地が控へて居つたからである。失業、生活標準、及び、賃銀率は總て西部自由地に依賴する事に依つて解決せられた。此の土地の豐富なる一事は大いに經濟的及び社會的問題を單純化し、不景氣及び恐慌時に於ける安全瓣として作用した。(七)從つて勞働階級と社會爾余の諸階級との鬪爭は極めて稀小にして、勞資間の不調、罷業等の發生せる場合にも、多くは双方の妥協に依つて溫和に解決せられ、公安を害する事件の外は法律の手段に訴ふる事は殆んど無かつたのである。(八)一八〇〇年より一八六〇年に至る迄に賃銀は殆んど二倍に騰貴し、然も生產の一般的增加は勞働者をして失費を增加する事なしに生活し、不斷に其生活程度を向上せしむる事を得せしめた。同じ事は又地方小農民の境遇に就ても云へる。農業機械の發明は英國に於けるが如く彼等の生活を脅かすものには非ずして、却つて彼等をして大規模農業從つて利潤獲得の爲の生產を可能ならしめ、舊時の如き僅かに其生命を維持するに過ぎざりし狀態は消滅した。(九)人口の增加は漸次マルサス及びリカアドオの說きし所と反對に貨幣賃銀、實物賃銀の双方を上進せしめ、勞働者の生活標準は不斷に高まりつゝあつたのである。

斯かる事情の下に於ては、如何にして「陰慘科學」としての經濟學が存在するの餘地が有らうか。人心は皮相的と成り、樂天的とならんとする。斯くて此等の事情はケリイを驅つて、人間の意志より獨立せる經濟法則の自然的體系の存在を主張せしめ、全社會特に勞働階級の繁榮の增進は此の法則の自發的結果であり、其行動を挫折阻害するものは唯〻人間の無智と邪惡とがあるのみ、總て良く治められたる社會に於ては人口は充分自ら調節し、人口に比して衣食の資が欠乏するは文化の比較

的低度の階段の特徴を爲すものにして、一層高度の文化階段に於て見らる可きものに非らず（一〇）との信念を抱くに至らしめたのである。

（一）Cf. 13th Census of the U. S. taken in 1910, Vol. I : Population, 1913, p. 24; quoted by Bogart & Thompson, Readings in Economic History of the U. S. 1917, p. 778.

（二）Cf. Estimated Valuation of National Wealth, 1850 1912, Ceusus Bulletin, 1915, pp. 14-16, 18-20 ; quoted by Bogart & Thompson, op. cit., p. 813 ; K. Coman, The Industrial History of the U. S., 1905, p. 212.

（三）Turner, op. cit., p. 110.

（四）ibid., pp. 110-111.

（五）E. D. Fite, Social & Industrial Conditions during the Civil War, 1910, p. 1.

（六）L. R. Wells, Industrial History of the U. S., 1924, p. 284.

（七）E. L. Bogart, the Economic History of the U. S., 1907, p. 228

（八）Poussin, the U. S., its Power & Progress, p. 476 ; quoted by G. S. Callender, Selections from the Economic History of the U. S., 1765-1860, 1909, p. 714

（九）Wells, op. cit., p. 284.

（一〇）J. K. Ingram, A History of Political Economy, 2nd ed., 1909. p 167.

四

リカアドオの分配論は必ずしも其價値論を前提とするものでは無い。之れに反してケリイの分配論は其價値論より出發する。彼は從來の經濟學者と異り、富と價値との兩者を全然別の範疇に屬せしめんとする者である。彼は云ふ。人間と自然とが相對立する如く、富は正に價値と相對立するものである。富が有用なる生産物の綜和として看做さるゝ時、そは『常に無償なる自然の勤務を支配する力の中に存し』（一）、而して『人間の自然に對する支配を獲得せんが爲の道具』が即ち資本である。（二）之れに反して、『價値とは吾人の目的に必要なる貨物又は事物を獲得するに際し、打勝たざる可からざる抵抗の尺度、換言すれば人間に對する自然力の尺度』（三）であり、一面そは『欲求せられたる事物を獲得するに先立ち、打勝たざる可からざる抵抗に對する吾人の評價』（四）を示すものである。

人間は其勞働に依つて自然の抵抗に打勝ち、欲求せられたる事物を獲得するものなるが故に、財の價値の唯一の原因は勞働である。然らば財の交換價値は過去に於て其生産に費されたる費用に依つては決定せられずして、現在の智識と熟練との下に於て再生産に要する費用に依つて左右せらるゝや明らかである。從つて生産物の價値が社會の進歩と共に次第に低落するは疑ひを入れざる所である。而してこは事物の一般的眞理にして、土地と雖も決して此の例に漏るゝものでは無い。勿論人間は本源的に土地を創造する事は出來ぬ。然し乍ら人間は神に依つて與へられたる土地を變じ耕地となすのである。土地は其占有前に在つては空氣、日光、水等の如く自由財である。而してそが價値を有するに至れるは、勞働に依つて行はれたる改良の結果にして、唯何等かの種類の人間の努力と關聯してのみ其價値は騰貴する。即ち吾人が經濟生活に於て關聯を有するものとしての土地は、實に人間に依つて生産要具として構成せられたるものに外ならぬ。土地は爾餘の形態の資本と等しく、資本の一種である。而して資本はそが如何なる形態を取ると雖も悉く同一の法則に從ふ可きを以て、土地の價値は過去の人間の勞働に基くも、其勞働量に依つて決定せられずして、現在の狀態の下に於

て新らしき土地を同一の生産力あるものたらしむるに要する勞働量、即ち再生産費に依つて左右せらるゝのである。(五)

扨て、地代とは土地の使用に對する支拂ひである。而して土地に、して資本の一形態であり、土地所有は畢竟資本所有に外ならぬものとするならば、地代は爾餘の資本物件の使用に對して支拂はるゝ利子と本質上同一なる可き筈である。地代は「土地の本源的にして不可滅なる力の使用に對する報酬」には非ずして、地主の過去の勞働に對する報酬である。(六) 地代は利子と共に、其起源を自然と人力との間の闘爭に見出すものである。從つて自然の支配强き場合、即ち地價が大なる場合には地代は高く、反對に人間の支配强き場合、即ち地價が少なる場合には地代は低い。然るに社會の發展、發明技術の進歩に連れ再生産費は下落するが故に、地代は之等の進歩と共に土地生産物に比例して漸次低落する事となる。(七) 所謂リカアドオの地代學說なるものは思索的空想にして、總ての經驗と矛盾して居る。耕作は事實其學說が推定して居るが如く最も肥沃なる土地より初まつて漸次劣等地へ下降して行つては居らぬ。反對に、瘠地より沃地へ、山腹の乾燥せる砂質の土地より谷間の肥沃なる土地へと進むのが耕作の自然的順序である。即ち人口及び富、從つて又團結力が增大する場合、常に最初に耕作せられたる瘠地が放棄さるゝ傾向が生ずるのである。(八) 蓋し如何に肥沃なる土地が存在するも、初期の農業技術を以てしては其等の土地は伐木し得ぬ程の密林に蔽はれ居るか、又は排水し得ぬ程の沼沃地なるか、乃至は猛獸毒蛇の横行する土地なるか、又は疫病の危險ある不衛生なる土地なるか何れかである。斯かる土地は人口增加し資本の蓄積を見るに非ざれば、決して耕作せらるゝ事が無い。之れに反し、へば山腹の如き、地味劣等なるも却つて其れが爲に草木の繁茂を妨げて居る土地は人の勞働に對して直ちに其報酬を生ずるものなるを以て、先づ耕作せらるゝのである。(九) 唯、注意を要するは、上述の議論は、人々が比較的肥沃なる土地即ち勞働に對して比較的大なる收益を齎す土地を耕作するに必要なる力を充分に有する場合に、耕作の爲に先づ瘠地を選ぶと云ふ事を推定するものでは無い。人々は常に彼等が支配し得る最良の土地を取る。然し進歩しつゝある社會、即ち人口と富との增殖に依つて人々の團結力が增進しつゝある社會に於ては、常に耕作は比較的劣等なる土地より漸次一層肥沃なる土地へと推移するものなる事を主張するに止まる(一〇)、と。

(一) H. C. Carey, Principles of Social Science, 1873, Vol. I, p. 186.
(二) ibid., Vol. III, p. 50.
(三) ibid., Vol. I, p. 158.
(四) ibid., Vol. I, p. 148.
(五) Cf. ibid., Vol. I, pp. 163, 164, 165, 168, 170, 174, 175; Ingram, op. cit., pp. 168 169; A. L. Perry, Political Economy, 19 h ed. 1887, pp. 279-280
(六) Cf. Carey, op. cit, Vol. I, p 163.
(七) Cf. ibid, Vol. I, p. 158; Turner, op. cit., pp 118, 121, 122.
(八) Cf. Carey, op. cit., Vol. I, pp. 106-107, 142, 145-146; ibid., Vol III, pp. 131, 141
(九) Cf. ibid., Vol. I, p. 96; H. D. Macleod, Dictionary of Political Economy, 1896, Vol. I, p. 387.
(一〇) Carey, op, cit, Vol. III, p. 163.

五

更にケリイは云ふ。リカアドオ氏は、優良地の地主は彼が土地に投下したる資本の利子と最劣等地との收益の差違とを合算したるものを名目地代として收受すると說き、而して此の收益の差違こそ眞の地代であると做す。然し乍ら耕作の自然的順序にして氏の說く處と正反對であるならば、『最初の定住者は彼の土地を貸與せんとする際には、利潤マイナス收益の差違を（名目地代として）收受する事を余儀なくせられる。』(一)こは財の價値が再生產費に依つて左右せらるゝの理よりも亦容易に推論し得る所であらう。リカアドオ氏は又、富及び人口の增加に從ひ一層劣等なる土地に依賴する必要生ずるに連れて、地主の分前は增加する傾向を有する、換言すれば、地代は勞働が漸次不生產的と成るに連れて昂騰するとの命題を揭げて居る。然し乍ら、若しも耕作の自然的順序にして既述の如くならば、『此の命題の正反對が眞理でなければならぬ。斯くて地主の分前は漸次減少し、勞働者に對して增加せる量の一層大なる分前が殘らねばならず、勞働者の究極の運命は隸屬に非ずして、自由でなければならない。』(二)『故に物質に對する人間の力の增大と共に、人間に對する人間の力は減退し、而して人類の諸部分の間に平等を確立するの不斷の傾向が見らるゝのである。』(三)

次にリカアドオ氏は農業上の改良が地主に對して不利であると說くが、『地代額は凡ゆる改良と共に增加し、斯かる改良に對する凡ゆる障害と共に減少する。斯くて地主と勞働者とは互ひに完全なる調和の中に存する。耕作の改良は必然的に富の增殖より發生する。鋤や犂が多くなればなる程、又其品質が優良となればなる程、人間の努力に對する收益は益〻大となり、而して地代は愈〻大となる。……蒸氣機關が多くなり排水工事が容易となればなる程、勞働收益は大となり地代も亦大となる。工場が多くなり被服料獲得に要する勞働量が減少すればする程……土地改良費に向けらる可き割合が大となり、又勞働收益、地代共に增進する。故に地主の利益は社會の富の增大及び耕作改良を助成する凡ゆる手段に依つて直接增大せらるるであらう。』(四)即ち地代は爾余の資本物件に對する利子と共に『富及び人口の增加に連れて額に於て增大し、而して收益に對する割合に於ては下落する傾向』(五)を示し、賃銀は相對的にも絕對的にも騰貴する。(六)斯くて是等の異れる社會諸階級の利害の調和を見るのである。即ち社會の進步に依つて利益さるゝものは一部の階級には非ずして全階級である。

勿論人口がマルサス氏の說くが如く幾何級數を以て增加し、其停止する處を知らずとせば、此の調和を維持する事は出來ない。『マルサス氏は吾人に告げて曰ふ、「凡ゆる生物には其の爲に用意せられたる食物以上に增殖する不斷の傾向がある。」と。然し乍ら事實は何處に於ても供給は需要の結果なる事を證明する。凡ゆる生物の爲に存す可き食物量は實際上無限である。……吾人は全國の森林に於て食物を見出し得る丈けの家畜よりも、更に多數の家畜を一農場が飼養し得る事を知る。然らば先の場合に於て百英町の土地より供給せらるゝ食物よりも、後の場合に於て一英町の土地より得らるゝ食物の方が一層多量なる可きは極めて明白である。同樣にそは既に全能の神に依つて所謂「用意せられたる」ものなる事も明白である。蓋し人は最初此の地球內に置かれざりし所のものを土地より引出す事能はざるが故である。』(七)何處に於ても食物は求め得らるゝものなる事を、人々は他人と

の結合に依つて知らねばならぬ。此の事に失敗すると、人々は『リカアドオ・マルサス流の著作家と共に所謂「自然の鄙吝」を否難する。然し困窮の實際の原因は人々彼等自身の欠點に見出さる可きものである。……如何に所謂「用意せられたる」力の貯藏量が大なるも、人間が其力を適當に指揮指導し得るに至る迄は、潜在未開發の儘たらざるを得ぬのである。』（八）單に所謂「用意せられたる」食物量が無限なるに止まらず、食物の供給は其需要に比例して增大する傾向を有する。然も一方、食物に對する人間の絶對所要量は漸次減少する傾向があるのである。（九）更に又人口は自己調節的である。勿論吾人は社會の或る狀態に於て、人間の增殖力が食物の供給量を凌駕せし事實の存在を否認する者ではない。然し乍ら、そは單なる事實にして、法則と稱す可きものでは無い。文明が人間の勞働に代ふるに自然力を以てするの必然的結果は、筋肉勞働の範圍が漸次縮少し精神的活動の領域が漸式擴大する事に依つて、人間の精力の生殖力から生命維持力への轉向を來し、以て人口增加率を遞減せしむるであらう（一〇）、と。

以上の所說を以て觀るに、既に人口の增殖にして富を增大せしめ、富の增加は更に人間の自然征服力を增大せしめ、更に其以上の富の蓄積を容易ならしめ、富の增加に於ける進步加速度的と成るとするならば、動態的見地よりして收益遞減の法則の作用し得る余地は無くなり、而して反對に收益遞減が不斷に齎らさるゝ事となる。更に土地に就て見るに、耕作が常に瘠地より漸次沃地へと進むものとするならば、新らしき土地が耕作せらるゝに連れて土地收益は愈々大となり、地代の相對的下落と相俟つて、一定量の勞働に對する收益は加速度を以て遞增する。而して賃銀の遞增は如何なる企業に就て見るも等しく起る所なるを以つて、社會諸階級の富の程度は漸次平均する傾向を有するの道理である。然らば斯かる事物の行程は人類究極の運命に就て何を物語るものであるか。そがリカアドオの所說と等しく、靜止狀態なる事は其人口論其他から之れを察知する事が出來やう、即ち人口が極度に增加し最早此の地上に人を容るゝ餘地が無くなる時に至る迄、人口は漸次其增加率を減じ行き、遂に此の極限に於て靜止するに至る。而して一方富の增加率は人口增加率の減退と共に減退し、其靜止と共に靜止する、然し乍ら此の極限に於ける人類の狀態は、リカアドオの場合に於けるが如く、地主獨り富裕にして勞働者は僅かに其生命を維持するに過ぎざる陰慘なる狀態とは正反對に、物資は極めて豐富であり、自然は人間に代つて勞作し、人は專ら精神的方向にのみ活動し、而して個人の生命は極めて長期に亙る。一方社會狀態は理想的と成り、貧困は全く其跡を斷ち、各個人の私有財產は其大少の別を撤するであらう。即ちそは吾人人類が曾て一度失ひたる樂園への復歸を豫言するものに外ならぬのである。

（一）Carey, op. cit, Vol. III, p. 142.
（二）ibid., Vol. III, pp. 143-144.
（三）ibid., Vol. III, p. 134.
（四）ibid, Vol. III, pp. 152-153.
（五）ibid., Vol. I, p 176.
（六）Cf. ibid., Vol. III, pp. 112-113, 131-133, 159.
（七）ibid., Vol. III, pp. 349-351.

（八）　ibid., Vol. III, p. 351.

（九）　ibid., Vol. III, p. 352.

（一〇）　Cf. ibid., Vol. III, pp. 266, 302-304, 395.

六

再びリカアドオとケリイとの所論を比較するに、リカアドオの學說は、不變の力を有する人類の生殖力との關係に於ては土地の供給が制限せられて居る事、並に土地の遞減的生產力を假設し、ケリイの學說は、人類の發達に連れて減退し行く人類の生殖力との關係に於ては土地の供給が增加するとの原則の上に打建てられて居る。リカアドオに在つては、勞働は土地以外の任意加增財の價値のみを說明し、ケリイに在つては、勞働は土地の價値をも說明する。前者の耕作の順序は沃地から瘠地へと進むものなるも、後者の耕作の順序は瘠地から沃地へと進むものである。リカアドオは土地を生產の特殊要素と看做すも、ケリイは土地は資本と看做す。從つて前者に在つては、地代は無地代限界以上の較差的餘剩であり、後者に在つては、土地の形態に於ける資本上の利子である。リカアドオは農事改良は全地代の減退を惹起すると思惟し、ケリイは全地代の增加を惹起すると思惟する。更に前者に取つては、人口の增加は、收益遞減並に利潤及び賃銀の損失に基く地代の騰貴を意味し、後者に取つては、收益遞增並に地代及び利潤の損失に基く賃銀の騰貴を意味する。從つてリカアドオは自然の鄙吝を通じて貧困に對する說明を求め、ケリイは人間の過失を通じて貧困に對する說明を求めて居る。

斯かる相違は一面、前者が佛國との第二次百年戰爭の終了時に於ける悲觀的英國に居住し、後者が一八三七年後の繁榮の黃金時に於ける樂觀的米國に居住せし事、リカアドオ當時の英國は貧民の增大に惱殺さるゝと共に、穀物に對する需要の增加は耕作限界點の下降を惹起し、地代は漸次騰貴するの傾向を示して居り、一方ケリイ當時の米國に於ては、極貧者は絕無にして、人口の增加從つて穀物に對する需要の增加は富の增加と農業技術の發展を伴つて、耕作が漸次一層肥沃なる低地へ向ふの觀が有り、而して勞働者の境遇は不斷に改善されつゝありし事、更に英國は穀物輸入國にして、米國は穀物輸出國なりし事等の周圍の事情に影響せられたるものなる事明かなるも、然も其根本的なる相違は兩者の見地の相違に基くものである。即ちリカアドオの地代概念は靜態的であり、其公式は不變的狀態の測定に役立つものなるに反し、ケリイの地代概念は動態的にして、彼は社會を進歩的のものと見て居るのである。即ち、リカアドオの地代論の核心をなすものは收益遞減の法則である。而してケリイはリカアドオの學說を反駁するに當つて一見此の法則の存在を否定せしに非ずやと疑はるゝが如き言を作して居る。然も彼は其の著作の何れの部分に於ても、定限せられたる面積の土地よりの收益遞增を主張して居らない。假りに山腹の土地が絕へず收益遞增を齎らすものとせば、其土地はやがて低地よりも生產的となり、敢て低地を耕作するの要無きに至る可く、斯くてはケリイの所謂耕作の自然的順序の主張は全く無意義とならざるを得ない。此の矛盾を解決せんとせば、ケリイに取つては、リカアドオに於けるが如く土地は生產上の定限的要素に非ず、從つて面積の制限なる概念は全然彼の推理の中に存せざりし事に想到せねばならぬ。即ちケリイに取つての收益

遞增は、リカアドオの意味するが如き靜態的收益遞減の單なる否定とは全然異るものである。彼に取つては、問題は長期に亘る動態的のものである。

土地は勞働及び資本と共に生產要素である。生產要素の供給は其の單なる量に依つては測定せられずして、其收益に依つて測定せられる。勞働者の數は勞働の供給量を示すものでは無い。吾人は其勞働者の熟練、力及び組織の如何を知らねばならぬ。同樣に、土地の供給量を云々する場合には、位置、地味、及び集約の程度を面積と等しく考慮に入れねばならぬ。更に如何なる生產要素と雖も、其潛在的效用が有效效用と成る迄は經濟的には存在せぬものである。海底に於ける金塊は單に潛在的效用のみを有するを以て、經濟的の存在物では無い。同樣に、ケリイの意味に於ける肥沃なる沼澤地は、人間が之れを支配するに至らざる限り、經濟的の非存在である。斯かる、人間の欲望充足の用に供し得ざる土地は、土地の供給の一部を形成するものでは無い。現在の狀態の下に於て利用不可能なる土地をも含めて、土地の供給は定限せられて居ると斷定する者の誤りなるは云ふ迄も無い。運河、排水、灌漑、交通機關の發達等、從來利用不可能なりし土地を利用せしむるに至る所のものは土地の有效效用、從つて土地の供給を外延的に增加するものである。又集約的農業を可能ならしむる凡ゆる農事改良、即ち一定面積の土地をして從來よりも更に多量の需要に應ずるを得せしむる一切の手段は、潛在的效用を有效效用に變じ、以て土地の經濟的供給を內包的に增加するものである。(一)

扨て收益遞減は總ての生產要素に共通なるものであり、畢竟、之れを生產要素間の不比例に歸せしめ得る。此の生產要素間に比例を保たんとするの目的に對する手段は即ち「代替」(Substitution)である。代替は各要素が最高能率を擧ぐる樣に調節せんとする。即ち不比例は收益遞減を意味し、眞の比例を齎らし又は之れに近づかしむる代替は、收益の增加を意味するものである。土地、資本及び勞働が全然耕作にのみ使用せらるゝ純然たる農業經營に於ても、單に代替の範圍が比較的制限せられて居るに過ぎない。(二) 然らば即ち靜態的收益遞減と動態的收益遞增とは全然異なる範疇に屬し、從つて一方を認める事は決して他方を否定する事にはならぬのである。(三) ケリイの所謂耕作の推移を、斯かる光を以て照すならば、之れを次の如く叙述する事が出來やう。即ち、人口は先づ瘠地に定住する。此の場合には資本及び勞働が不足要素である。やがて資本及び勞働は增加して土地が不足要素となるも、人口及び富の增加は資本及び勞働の比較的多量を必要とする一層肥沃なる土地を占有耕作するを得せしめ、却つて資本及び勞働を不足要素たらしめる。やがて資本及び勞働は增加して、土地は不足要素となり、耕作は更に一層肥沃なる土地へ移り行く。之等の運動の結果を動態的見地より觀る時は收益遞增なるも、然も總ての運動は收益遞減の法則に從ふものである。即ちカール・ディールが「リカアドオ論」に於て、物理的法則としての收益遞減は人間活動の進步に對して限界を置くも、然もそは唯一つの限界を設くるに止まり、人間活動の進步を阻止するものに非ずと做したるの言(四) は其儘以てケリイの見解と觀る事が出來やう。

(一) Cf. Turner, op. cit., pp. 126-127, 128-134

(二) Cf. ibid., pp. 135, 136, 137 ; Marshall, op. cit., pp. 355-357, 435.

（三）Marshall, op. cit., p. 165.
（四）Diehl, op. cit., Bd. I, S. 320

七

洵にケリイの所說を斯の如く解する時、そはリカアドオの地代論を一歩進ましむるに當つて一大暗示を與ふるものと云はねばならぬ。リカアドオの學說は制限せられたる靜態的假設の下に於ては正當である。然も彼はマアシャルの云へるが如く、其の推論を收益遞減の法則より演繹するに餘りに性急であつた。（一）勿論一切の科學に取り推理を進むる上に於て、其對象たる一つの現象の中に共在繼起する諸力中、二三のものゝみを取つて總て其以外の諸力は之を作用せざるものとして其活動を度外視する事に依つて、始めて其現象の部分的解決を爲し得るものなるも、然も爾餘の諸力は決して無力なるに非ざるが故に、必ずや第二段に至つて、假設的に無視せる諸力を漸次に解き放ち、是等諸條件の複雜なる交互作用を觀察し、以て動態的問題の範圍を順次に擴張し、靜態的假定の範圍を狹めて行かねばならぬ。（二）ケリイは人口の增加從つて組織の增加と共に土地收益は遞增すると云つた。事實各農夫は、農業者たると或は都會人たるとを問はず、隣人の存在に依つて助けらるゝものである。即ち收益遞減の法則は、一地方の農業に投ぜらるゝ全部資本及び勞働には單獨の農場に於ける程に鋭敏には作用せぬのである。勿論ケリイの所謂耕作の自然的順序は動態的見地よりしても普通的に眞なりとは云ひ得ない。然し乍ら、最初に選ばれたる土地が常に終極に於て最も肥沃なる土地となるとは決して期待してはならぬ。リカアドオはマアシャルの指摘せるが如く、此の點を考察して居らぬ。成程新しき國に於ては先進國の農夫が肥沃地と見る土地よりも彼が劣等地と見る隣接地の方が時に先に耕作さるゝと云ふ事實は、リカアドオの學說の一般要旨と矛盾するものではない。リカアドオは最も肥沃なる土地が最初に耕作さるゝと說いたが、之れは彼の云はんとする意味に於ては正當である。然し乍ら上記の事實の實際的重要性は、人口の增加が衣食の資料に加ふる壓迫を增加せしむる條件に關聯して存するのである。即ちリカアドオは稠密なる人口が農業に與ふる間接の利益を看過して居る。人口の增加は一般に共共同能率の比例以上の增加を伴ふ。人口の增加が之れに等しき享樂の物質源泉及び生產補助資料の增加を伴ふ時は、凡ゆる種類の享樂の總體所得は比例以上に增加するものである。（三）

更にリカアドオは地味の差異の不變性を主張する。然し乍ら地味の尺度は總て所と時とに相對的でなければならぬ。土地の沃度には絕對的尺度は無い。生產技術に些の變化無き場合に於てすら、生產物に對する單なる需要の增加が、沃度に關して從來二隣接地區が占めたる順位を轉倒する事が屢〻ある。更に耕作が單に粗放的なる場合に地味最も劣等なる土地の多くは、耕作が集的約となる場合に地味最も豐かなる土地となるものである。マアシャルは此の理を鎖を例に取つて巧みに說明して居る。（四）更に又、現に廣く栽培せられて居る作物及び特殊の土地に對する耕作方法の好適性に於ける變化と獨立に、土地の價値の相違が不斷に減少し行くの傾向がある。即ち何等反對の特殊原因無き限り、人口と富との增加は劣等地の價値を肥沃地の價値に接近せしむるものである。蓋し劣等地と雖も其の日光、熱、空氣等の年所得は恐らく優良地の其れと等しく良好であり、一方其欠點は勞働

に依つて大いに減少され得るが故である。(五)此の點に關し、ルロア・ボオリユウは『富の再分配論』第二章に於て、此の傾向を例證する幾多の事實を揚げて居る。(六)即ち土地の差違及び富の不平等なる分配の爾餘の客觀的原因は人間の差違が少であり、人間の消費が靜的である文明の初期階段に於てのみ著しく、現今の如き文化階段に在つては、知識の增大が劣等地を一層優良なる土地となす事に依り土地の差違を減少せしめ、一方消費の多樣性の增加が此の變化を促進せしめて、物理的原因に基く地代額を減少せしむるのである。(七)マアシャルが『現代に於ては新國の開發が低廉なる海陸運賃と相俟つて、英國勞働者の週賃銀が動もすれば良小麥の半ブッシエルにも足らざりし際に、マルサス、リカアドオに依つて使用されたる意味に於ての收益遞減の傾向を殆ど阻止した』(八)と云へるは斯かる意味に於てゞある。

次にリカアドオの學說は自然の客觀的差違にのみ注目して、人間の主觀的差違を看過して居る。技術的進步又は農事改良のみならず、農業者の個性も亦收益並に收益の增加に對して重大なる役割を演ずるものである。(九)即ち通常優れたる農業者は劣等地の收益をして、才能の比例以上の增加を來たさしめる。換言すれば優れたる農業者が優劣二個の土地を耕作して得たる收益の差額は、然らざる者が之等の土地を耕作して得たる收益の差額よりも少である。更にリカアドオの學說に於ける地代所得と爾餘の所得との間の完全なる反撥に就ては、彼に歸依して居るデイールすら尙反對を唱へ、地主、資本家、勞働者の三階級の間に或る調和の存する事を說いて居る。(一〇)若し此の點に關するケリイの所說を餘りに樂觀的にして空想的なりとするならば、リカアドオの其れも又餘りに數學的にして抽象的なりと云はねばならない。

要之に、リカアドオの地代論は自利心及び性的情熱なる人の主觀的性質の不變性を假定し、地味に於ける差違の不動並に農業上の收益遞減の傾向の不變を前提として居る。之等のものは原始社會に於ける原始人に就ては略〻妥當しやう。然し乍ら、彼の學說は資本の使用並に分勞を是認するものである。若しも社會が資本及び分勞を有するならば、文明の結果は原始人及び原始社會の上に影響して、新たなる社會に於ける新たなる人間を創造せねば止まぬであらう。(一一)即ちリカアドオの主なる誤謬はデイールの指摘せるが如く、方法論上に存するものである。換言すれば彼の地代學說が全然靜態的法則であり、靜態的狀態の測定にのみ役立つものなるに拘らず、一定の發達階段を想定し、演繹的なる研究方法の適用範圍を越えて此の研究方法を擴張し、而して演繹的方法のみに依つては全く答ふ可からざる問題の解決に迄此の方法を適用せる事に基くものである。(一二)

洵にリカアドオはシモン・ネルソン・パッテンの云へるが如く、誤れる賞讃を必要とするには餘りに偉大なる學者である。(一三)ケリイはマルサスを貧困其者なりと觀、リカアドオを法外なる地代其者なりと解し、貧困と法外なる地代とが憎む可きものたるが故を以てマルサス及びリカアドオの學說に反對せるかの觀ある事、リヴァモアーの言の如くなるも(一四)、然も彼の駁論はそれを一笑に付し去る可きものではない。ケルトの血を受繼いで、研究上科學的精神の特徵たる緩徐にして忍耐强き分析を爲す能はざりし彼の判斷の仕方は餘りにも感情的であり直感的であつた。而して彼はリカアドオと同一の方法論的過誤に陷り、且つ其のリカアドオ攻擊は、多くはリカアドオ地代學說の本質を

誤解せるに基き、從つて的を失したる非難の矢を少なからず放つて居る。然も尙吾人は其中に幾多の健實なる實質を有する事をマアシャル（一五）と共に認めねばならぬ。此のリカアドオの學說の欠陷を指摘し得、以て其學說に對する謬れる讃辭を排擊せる點に於て彼の經濟學上の貢獻が存するのである。即ち既述の如くケリイは自然法的經濟學說を復活せしめんとせる者ではあつたが、然し彼の云ふ自然的秩序は、フィジオクラアトに於けるが如く人爲的秩序と相對立する純客觀的存在では無い。彼に在つては、そは人類の性質の中に內在し、人類社會と共にあり、又人類社會共者でもあるのである。ケリイに在つては、富に非ずして人間が關心事であつた。洵に彼は近代の經濟學者と共に、人間の血管の中に人間の血を見る事を知つた　彼は經濟發展に於ける道德の力の有力なる干涉を認め、意志と自由と感情の力とに向つて彼の眼を開いたのである。（一六）斯くて彼は古典學派が共推論の根底として用ひたる物理的法則の上に疑惑を投げ、社會の生產力及び社會成員の所得を單に地代法則及び收益遞減の法則より演釋する事に依つて決定する經濟學の體系を極めて有効に攻擊し得、而して靜態經濟學に對するものとしての動態經濟學の端を開くに至つたのである。（一七）

世人或ひは云ふ、ケリイは正統學派の人口學說並に地代學說を根本より顚覆せる者であると。然し乍ら、彼は一般に承認せられたる正統學派の學說と正反對なる逆理を說く者では無い。彼が社會の進步と共に人類の生殖力は原則として減退すと說ける場合、そはジョン・スチュアート・ミルが社會の進步と共に人間の「愼重なる抑制」が大となり、以つて人口の過度の增殖、從つて勞働階級の生活標準の低落を阻止すと說けると矛盾するものと云ふよりも、寧ろ客觀と主觀との相違、程度の差違の存するものあるに過ぎず、而してリカアドオの意味に於ける收益遞減の法則がケリイの地代學說の前提となる可きものなる事は前述の如くである。然らば即ち彼が顚覆せんとせし所のものは正統學派の學說其者には非ずして、直接物理的基底の上に打建てられたる經濟學上の法則を餘りに高く尊崇し、一切の經濟現象を是等の法則の色眼鏡を通じてのみ觀察せんとせる彼等の態度、物理的不動的社會觀であると云はなければならない。洵にケリイは正統學派の呻吟の世界、澱める潮より脫せんと努力せる者であつた。

（一）　Marshall, op. cit., p. 165.
（二）　Cf. ibid., Preface to the 7th edition, vii-viii.
（三）　Cf. ibid., pp. 164, 165-166 & note, 320-321.
（四）　Cf. ibid., pp. 157, 160.
（五）　ibid., p. 162.
（六）　Cf. ibid., pp. 162-163 note 2.
（七）　S. N. Patten, Essays in Economic Theory, ed by Tugwell, 1924, "The Theory of Dynamic Economics," p. 83.
（八）　Marshall, op. cit., Preface, ix.
（九）　Cf. Diehl, op. cit., Bd, I, S. 321.
（一〇）　Cf. ibid., Bd. I, S. 351-353, 359-366, 370.
（一一）　Cf. Patten, op. cit, "the theory of Dynamic Economics," pp. 41-42.

（一一）Cf. Diehl, op. cit., Bd. I, S. 313-314.

（一二）Patten, op. cit., "The Interpretation of Ricardo," p. 144.

（一三）C. H. Livermore, Carey & his Social System ; Political Science Quarterly, Vol. V, 1890, Dec. No. 4, p. 581.

（一四）Cf. Marshall, op. cit., p. 164

（一五）Cf. Livermore, op. cit., pp. 573, 580.

（一六）Cf. Patten, op. cit., "The Theory of Dynamic Economics," p. 34.

（一七）

三木清著「唯物史觀と現代の意識」

本書は著者の論文集で、（一）「人間學のマルクス的形態」（二）「マルクス主義と唯物論」（三）「プラグマチズムとマルキシズムの哲學」（四）「ヘーグルとマルクス」の四篇を收めて居る。此等の諸篇に說かれてゐるものは、著者自身の語を以ていへば、「理論の系譜學（Genealogie der Theorien）の目論見」即ち「如何にして一定のイデオロギイは出生し、成長し、崩壞し、そして新しいものによつて代られるかの系統を」理解せんとしたものである。而して此系譜學の根本命題は「歷史に於て存在は存在を抽象することによつて理論を抽象する」といふことにあると著者は言つて居り、而して此事を著者に敎へたものはマルクスであるといふことである。

著者は本書に於て、マルクス若しくはマルクス主義の偉大を幾多の點に就いて力說して居るが、其點の一つは、マルクスに於て「理論と實踐との辯證法的統一」があるといふことである。マルクシズムに於ける理論と實踐との關係は、次の如く說かれて居る。

「マルクス主義は理論と實踐とを、第一のもの、第二のものとして、單に對立せしめるのでなく、却て兩者を辯證法的統一にもちきたす。そこでは理論は實踐の要求する限りの理論であり、實踐は理論に指導される限りの實踐である。理論と實踐との對立物は相互に制約し合ひ、實踐は理論に指導されることによつて發展し、かくして發展した實踐は更に新しき段階に於ける實踐を要求する。理論と實踐とはかゝる必然的統一に於て段階を通じて相互に發展する。斯の如き辯證法的統一の故に、理論は決して現實の地盤から游離することが出來ない。」云々（七〇）。而して三木敎授に由れば マルクスに依るヘエゲル主義の克服も、事此に關するものゝやうである。